

# 「幼児期におけるキャリア教育に関する一考察」 — 人間関係形成・社会形成能力に着目して —

佐野 泉

A Study on the Career Education in Infancy.

— A Focus on Interpersonal and Competency —

Izumi SANO

変動の激しい社会に適応し、必要とされる能力を育成するシステムが、学校教育の中でなされているかという反省と改革が急務であることから、小学校からのキャリア教育の必要性が唱われて久しい（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2014）。小学校教育においてまず注目すべき点は、キャリア教育で育成を求められる能力のうち、人間関係形成に関わる「基礎的・汎用的能力」である。とくに、その中の「人間関係形成・社会形成能力」への注目は、小1 プロブレムやいじめ問題、不登校問題の解消または緩和に向けて重要な視点である。

現在、幼児教育におけるキャリア教育の重要性はさほど注目されていないが、人間関係形成に関しては、幼児教育においても重視している5領域の一つである。

そこで本研究では、特に幼小連携における様々な取組が行われ、効果を上げている5歳児の人間関係に注目し、小学校へつなぐキャリア教育の前段階として幼児教育が担うべき部分について検討している。また、具体的に人間関係育成に向けた幼児の仲間入りゲームプログラムを開発した。

## I. 問題と目的

### (1) 問題

近年の経済社会及び雇用環境の変化は著しく、社会に出て生活したり仕事をしたりする上で求められる能力も変化している。一方で、変動の激しい社会に適応し、必要とされる能力を育成するシステムが、学校教育の中でなされているかという反省と改革が急務であることから、小学校からのキャリア教育の必要性が唱われて久しい（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター 2014）。小学校教育においてまず注目すべき点は、キャリア教育で育成を求められる能力のうち、人間関係形成に関わる「基礎的・汎用的能力」である。とくに、その中の「人間関係形成・社会形成能力」への注目は、小1 プロブレムやいじめ問題、不登

校問題の解消または緩和に向けて重要な視点である。小学校で表出するこれらの課題は、幼児期の教育を見直すことで緩和されると推察される（佐野2011）。さらに、最近は「幼児期」からのキャリア教育にも注目され始めている。これは、小学校からのキャリア教育で注目している人間関係形成・社会形成能力は、幼児教育における5領域の一つである人間関係と深い関連性があると考えられているからではないかと考える。

## （2）目的

そこで本研究では、幼児期においても育成することが必要とされるキャリア教育の能力「人間関係形成・社会形成能力」が、幼児教育の本質とどのような関連があるかを検討することを第一目的としている。その上で、現状では人間関係形成・社会形成能力がどのように育成されているかを、参与観察により検討し、課題を緩和するゲーム開発をすることを第二目的としている。

## Ⅱ．キャリア教育における「人間関係形成・社会形成能力」と幼児教育5領域の「人間関係」との関連

### （1）キャリア教育で求める「人間関係形成・社会形成能力」

「キャリア」及び「キャリア教育」とは何かについて、国立教育政策研究所（2004）では、次のように定義している。すなわち、「キャリア」とは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における事故と働くこととの関係付けや価値づけの累積」であり、「キャリア教育」とは、児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」である。

2004年の報告書（国立教育政策研究所）によれば、これまで日本が取り組んできた「進路指導」という枠組みでの取り組みにおいては、就職か進学かなど、何を選択するかについての指導支援に重点が置かれがちで、如何に・何故という視点が不十分であったこと、小学校から高等学校までの連続性や一貫性を持った視点が希薄で、発達段階の達成という視点や意識が必ずしも明確でなかったという現状認識に立ち、各発達段階における能力や態度の到達目標を設定している。また、「職業観・勤労観」の形成に関連する能力を、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域に大別し、小学校低学年から高等学校までにおいて身に着けることが期待される能力・態度を、「職業観・勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組み（例）」として具体的に示しているが、ここでは、特に幼児教育に深く関わると考えられる「人間関係形成能力」に注目していく。「人間関係形成能力」は、さらに「自他の理解能力」及び「コミュニケーション能力」に細分化されている。2011年の中央教育審議会答申では、「職業観・勤労観」の形成に関連する能力をさらに拡大し、社会的・職業的自立や社会及び職業への円滑な移行に必要な力を検討している。それは、学

校教育で育てるべき能力として、近年挙げられているものが多様化していることが背景にある。具体的には、「生きる力」「生き抜く力」「学士力」「人間力」「主要能力（キーコンピテンシー）」などである。2011年答申ではこれらの能力の観点を踏まえて、社会的・職業的自立、学校から社会、職業への円滑な移行に必要な力を、生得的なものではなく、義務教育から高等教育までの学校教育において育成することができる力として捉えている点に意義があると考えられる。具体的には、社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行に必要な力として、「基礎的・基本的な知識・技能」「基礎的・汎用的能力」「論理的思考力・創造力」「意欲・態度及び価値観」「専門的な知識・技能」を挙げているが、特に幼児教育の「人間関係」に深く関わるのはこの中の「基礎的・汎用的能力」の中の、人間関係形成・社会形成能力である。2004年に示された「キャリア発達にかかわる諸能力」と「基礎的・汎用的能力」の内容とを比較検討すると、前者の人間関係形成能力と後者の人間関係形成・社会形成能力とは密接に対応していると言える。

## （２）幼児教育で求める「人間関係」

「幼稚園教育要領」においては、キャリア教育に関わる内容は明記されていないが、幼稚園教育の基本として挙げられている次の三点において類似する内容であることが示唆される。

すなわち、①幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること、②幼児の自発的な活動である遊びを通しての指導を中心とすること、③幼児一人一人の特性に応じ、発達課題に即した指導を行うこと、である。

特に５領域の中の「人間関係」に注目すれば、そのねらいは13項目に及ぶが、それらは人と関わる力の基礎であり、能力の根底にあるものとして、「心情」「意欲」「態度」であるとされる（榎沢ら2009）。人と関わる力は、体験を通し、また実感を伴って身につくものである。体験とは、肯定的な体験だけでなく、否定的な体験の両方を経験することが重要であると考えられる。またそこには否定的な体験を肯定的な体験につなげる保育者の適切な援助が不可欠となる。

更に発達段階と人との関わりについて注目すれば、年齢を重ねるごとに関わる相手が大人から子どもへと変化していく。その中で自我が芽生え、自己主張を行う中で自分や友達を知ることとなり、友達と関わる中で人との関わり方を学んでいく過程を支えるのが幼児教育で求める「人間関係」であると言えよう。

## （３）キャリア教育における「人間関係形成・社会形成能力」と幼児教育５領域の「人間関係」の関連

キャリア教育における「人間関係・社会形成能力」と幼児教育５領域の「人間関係」との内容相互の関係を検討するために、それぞれを表１にまとめた。直積的に関わり合うと考えられるものについては実線で結んだが、その他にも前者の「友達と仲良く遊び、助け合う」ためには後者の「共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う」必要があり、また「友達と楽しく

生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする」態度が育つことになると考えられる。

このように、前者と後者との内容相互の関係は密接であり、幼児教育を推進する中で、自然とキャリア教育につながる基礎的能力を育成していると考えられる。

以上から、キャリア教育において小学校で育成が期待される能力・態度は、そのまま幼児教育に人間関係で期待される能力と密接な関係にあり、幼児期からの育成が求められると言えよう。

表1 「人間関係形成・社会形成能力」と幼児教育「人間関係」との内容相互の関係

領域	領域説明	能力説明	文科省が示す、育成が期待される能力・態度	幼児教育「人間関係」で育成が期待される能力
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う</li> <li>・友達と仲良く遊び、助け合う</li> <li>・お世話になった人などに感謝し親切にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう</li> <li>・自分で考え、自分で行動する</li> <li>・自分でできることは自分でする</li> <li>・いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちを持つ</li> <li>・友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う</li> <li>・自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く</li> <li>・友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう</li> <li>・友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする</li> <li>・良いことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する</li> <li>・友達との関わりを深め、思いやりをもつ</li> <li>・友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする</li> <li>・共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う</li> <li>・高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深い色々な人に親しみを持つ</li> </ul>
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつや返事をする</li> <li>・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う</li> <li>・自分の考えをみんなの前で話す</li> </ul>	

### Ⅲ. 現状把握のための参与観察とプログラム開発

#### (1) 対象と方法

①対象：私立幼稚園（関東圏内A市内）5歳児75名（1クラス25名×3クラス）

②時期：観察およびインタビュー 2012年11月～12月、質問紙調査2013年1月

③方法：参与観察・インタビュー（担任及び幼児ー幼児へのインタビューは主に担任ー）

④記録：ＩＣレコーダー・ビデオ・写真・メモ

方法及び記録については、園長及び保護者の許可を得、実施した。

## （２）実態把握とプログラム作成

### ①参与観察及びインタビューによる園児の実態把握

参与観察および担任と園児へのインタビュー実施が11月から12月であったこともあり、各学級の仲間関係は良好であり、支持的風土が醸成された状態であると認知された。課題としては、仲良しの相手に対する認知度は高いが、普段関わりの少ない相手に対しては関心が低く、仲良しの相手に比べて話をする回数も極端に少ないことが明らかとなった。これは、参与観察によってよく遊んでいる子とそうでない子とに分け、その子の「好きな遊び・食べ物・色、得意なことは何か知っていることを教えて。」という質問に対する子どもからの回答を検討した結果である（表２参照）。

表２ 学級内の仲間関係に関する調査１ 相手の認知度

クラス	仲良しの相手に対する認知度			関わりの少ない相手に対する認知度			
	4項目全て	2～3項目	1項目	4項目全て	2～3項目	1項目	0項目
A	11	13	1	0	0	2	23
B	12	13	0	0	0	0	25
C	12	11	2	0	0	1	24

表内数字：人数

表３ 学級内の仲間関係に関する調査２ 一回の会話の中でやり取りをする回数

クラス	仲良しの相手とのやり取り数					関わりの少ない相手とのやり取り数			
	5回	4回	3回	2回	1回	3回	2回	1回	会話無し
A	4	7	13	1	0	0	0	1	24
B	2	12	11	0	0	0	0	3	22
C	0	9	12	4	0	0	0	1	24

表内数字：2日間の観察中のやり取り延べ回数÷会話数で得られた数字

また、参与観察から、仲良しに対してはアイコンタクトを取りながら話し、3回～5回のキャッチボール（やりとり）が見られ、その内容も深まっていく様子が伺えたが、そうでない場合はまず話をする機会がごく少なく、話をしてもアイコンタクトを取らなかったり、会話もキャッチボールには至らず、二言三言で終わってしまったりする状況が見られた（表３参照）。中には、一日中会話をする機会がない、または持たないという状況も観察された。

### ②実態から導出された仲間入りプログラム

園児の実態より、プログラム全ての狙いは仲間関係形成のきっかけづくりとした（表４参照）。



表4 仲間入りプログラム

プログラム	ねらい	内容と方法
1)ーア あいさつゲーム	新しい仲間づくりのきっかけとなる	相手の目を見て握手をしながら握手をする
2)ーイ あいさつゲーム	新しい仲間づくりのきっかけとなる	黙って見つめ合い、にっこり笑って握手をする
3)仲間集めゲーム	仲間関係を広げるきっかけとなる	「猛獣狩り」に合わせて、2人組・3人組・4人組などの仲間づくりをする 自己紹介をし合ってお互いを知る
4)サイコロトークでお話タイム	仲間関係を広げるためのきっかけとなる	グループの仲間とお話をする。 サイコロを振って出た目の絵についてお話のキャッチボールをする
5)好きなこと紹介タイム	仲間関係を深めるためのきっかけとなる	2人組でお互い自分が好きなものを紹介し合う。 次に2人組を合わせて4人組となり、ペア同士他己紹介をし合う。
6)あなたが好きな絵カードプレゼント	仲間関係を深めるためのきっかけとなる	相手の立場に立って考え実行する。 相手が好きなものがかいてある絵カードをつくって渡し合う

まず、幼児の心を開き、仲間関係を広げていくために、アイスブレイキングとしてより多くの仲間とあいさつするゲームを2種類作成した。一方は言語を伴うもの、一方は言語を伴わず、動作のみで実施するものである。前者は緊張をほぐすことを目的とし、後者はジェスチャーの楽しさを味わいながら、実態調査により明らかになった課題であるアイコンタクトをとることに集中させることを目的としている。続いて、関わりを持とうとしなかった仲間との関係を広げるゲームとして、「仲間集めゲーム」及び「サイコロトークでお話タイム」を作成した。前者は日ごろ園児が好んで遊んでいる「猛獣狩りゲーム」を取り入れ、グループを組む人数を変化させることによってそれまであまりかかわりを持たなかった子どもとも接触する機会を持たせる工夫をした。後者は3～4人の小グループでサイコロを振って出た目にかいてある絵を見ながらお話をするというものである。会話のルールとしては出た目の絵について、まず絵で表されたものが好きかどうかを話す。次に聞き手からなぜそう思うのかについての質問をし、理由を話していく。いわばお話のキャッチボールをすることになる。両者とも、今までよく知らなかった仲間の認知度を上げることを目的としている。最後に仲間関係を深めるために、「好きなこと紹介タイム」と「あなたが好きな絵カードプレゼント」を作成した。前者は、まず二人組になってお互いが好きなものを紹介し合い、次に別の二人組と組んだ後、それぞれのペアで他己紹介をしていくというものである。この活動により、話者は相手に伝わるような話し方をする必要があり、聞き手は相手の話を理解できるように

よく聞き、より詳しく知りたいと思ったことを質問するというようなお話のキャッチボール場面を自然発生させる意図も含んでいる。これは、キャリア教育で求める「自分の考えをみんなの前で話す」こと、及び幼児教育で求める「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」ことを育成する手立てとなると考えている。後者は、二人組になってお互いの好きなものを紹介し合い、プレゼントし合うというもので、活動を通して相手を思い、相手の気持ちに立つ共感配慮の芽生えを目指す。

#### Ⅳ. 考察

##### (1) キャリア教育と幼児教育との関連性

本研究では、キャリア教育における「人間関係形成・社会形成能力」に注目し、幼児教育5領域を比較することで、その関係性について検討した(表1参照)。その結果、相互の関係性は密接であることが明らかとなった。キャリア教育において、「人間関係形成・社会形成能力」は、「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」とされている。このことについて、関連する幼稚園教育要領の領域の内容を表5に纏めた(表5参照)。

表5 「人間関係形成・社会形成能力」に関連する幼稚園教育要領5領域の内容

領 域	内 容
健 康	・先生や友達とふれあい、安定感を持って行動する。
人間関係	・先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 ・友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。 ・自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 ・友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。 ・友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。
言 葉	・先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。 ・したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。 ・したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。 ・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。 ・親しみをもって日常のあいさつをする。
表 現	・様々な出来事の中で、感動したことを伝えあう楽しさを味わう。

「環境」の内容には、キャリア教育における「人間関係形成・社会形成能力」に直接的に関わるものは見当たらないが、内容の取扱い(1)には、幼児が、遊びの中で周囲の環境とか

かわる中で、「特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること」とある。このことが、キャリア教育で育成が求められている「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができる」につながるものであると推察される。

以上から、「人間関係形成・社会形成能力」に関しては、幼児教育のすべてにおいてその育成に取り組んでいると言えよう。

## (2) キャリア教育を幼児期から意識して実施する意義

「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」においては、「キャリア教育」という文言は見られないが、「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」では、幼児教育の基本として、第一に、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること、第二に、幼児の自発的な活動である遊びを通しての指導を中心とすること、第三に、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うこと、の三点をあげ、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない、としている。このように、幼児教育の基本そのものが「自発的、主体的な活動を促す」特徴を持つものであり、幼児教育の基本に則った保育を行うことこそが、キャリア教育を推進していると言うことができよう。

## (3) 「人間関係形成・社会形成能力」育成における、「仲間入りプログラム」実施の意義

キャリア教育と幼児教育との関連性が密接にあることはキャリア教育における「人間関係形成・社会形成能力」に注目し、幼児教育5領域の中の「人間関係」に特化してその関係性について検討した結果、相互の関係性は密接であることが明らかとなった（本研究考察(1)参照）。

本研究考察(1)で明らかにしたように、キャリア教育において、「人間関係形成・社会形成能力」は、「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」とされている。しかし、幼児の実態を検討すると、仲間関係には偏りがあることが明らかになっている。その偏りの原因を探るために保護者を対象とした聞き取り調査をした結果、対象が5歳児であっても幼稚園において本人の意志で仲間を選んでいるというよりは、むしろ近所で遊ぶ友達であったり保護者同士が知り合いであったりすることにより、仲間関係が維持されていることが明らかになった(表6参照)。これは、人間関係における本人の好みというよりは、環境の影響が大きいと推察され、現在の課題として、自然発生的には子ども自ら仲間関係を広げていくことが難しい現状にあると推察される。従って、幼稚園のように家庭での生活環境から離れた場所にいる他者が多く集まる中で新たな仲間関係を構築していくためには、保



育者による手立てが必要となる。その補助的教材として、本研究で開発した「仲間入りプログラム」を実施することは幼児の仲間関係を広げていく上で有効であると言える。

表6 幼稚園における5歳児の仲間関係（保護者への聞き取り調査より）

質問事項	寄せられた回答（複数回答可）
①仲良しのお友達を教えてください	近所に住む同年齢他者・・・68／75 幼いころからの知り合い・・・55／75 幼稚園で新たに見つけた友達・・・12／75
②仲良しになった理由を教えてください	近所に住んでいて、入園前から知っていた 母親同士が知り合いで、幼いころから知っていた 幼稚園入園後、自分で新たな仲間を見つけて意気投合した 知らない他児から声をかけられて意気投合した
③仲良しであることが分かった理由を教えてください	近所に住んでいて、よく話題に上るから 母親同士が知り合いで、よく一緒に遊んでいるところを見ているから 幼稚園であった出来事を話す中で、よく話題に上る子だから

## V. 今後の課題と展望

本プログラムは仲間関係形成時に活用できるものとして開発したものである。そこで、4月の学級開きの時期に実施し、その効果を検討する必要がある。また、本プログラムを開発するに当たり現状を把握するために対象としたのは一部地域にある幼稚園1か所である。そのため、地域性があるのか、また幼稚園と保育園との子どもの仲間に対する認知に相違点があるのかについての検討をしていない。こうした環境による影響の有無を検討することで、より一般できるものにしていく必要があると考える。さらに、幼児の仲間関係を円滑にしていくためには、実施回数やプログラムの順番、さらには内容についても検討し、必要に応じて改良する必要がある。現在、幼少移行期の段差について様々な方面から検証されていることも鑑み、今後は小学校入門期への縦断的な活動についての検討も視野に入れていく。

なお、本プログラムは、今回対象とした幼稚園において2013年及び2014年4月に実施し、概ね効果が期待できる結果を得ているが、今後も横断的縦断的に検討を重ね、十分な効果の立証を得る所存である。

## 【引用・参考文献】

- Barndt, T.J., & Ladd, G.W. Peer relationships in child development. New York: Wiley. 1989  
p.5
- Cassidy, J., & Asher, S.R. 1989 Young children's conceptions of Manuscript in preparation

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」文部科学省2011年

榎沢良彦・入江礼子『シードブック保育内容人間関係 第2版新幼稚園教育要領・保育所保育指針準拠』建帛社2009年 pp.1－20

Gesell,A. THE CHILD FROM FIVE TO TEN 1946 須郷博・山下俊郎・大場綾子・神山正治訳『学童の心理学』家政教育社1967年 pp.103－104, pp.379－384, p.435

濱名陽子「幼稚園におけるキャリア教育に関する一考察」関西国際大学教育総合研究所教育総合研究叢書第7号 pp.143－152

犬塚文雄『子どもたちの生きる力を育む教育カウンセリング』福音社2000年 pp.164－166.

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書』文部科学省 2014年

松尾智晶「キャリア科目受講満足度とモチベーション向上に関する考察—2012年度「自己発見系科目」受講生アンケート結果より—高等教育フォーラム 第3号 2013年 pp.21－30

松田己統美「幼・小連携の構造に関する教授学的検討（2）—G.Witzlackの就学能力論を中心に—」広島大学教育学部紀要第一部（教育学）（42）1993年 pp.97－115.

文部科学省「第1章キャリア教育とは何か」『小学校キャリア教育の手引き（改訂版）』2011年  
取得日：2014年6月27日 [www.mext.go.jp/component/a\\_menu/.../1306818\\_04.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/.../1306818_04.pdf)

文部科学省『幼稚園教育要領・保育所保育指針』チャイルド本社2009年

村上達也・桜井茂男「小学校高学年における対人関係の重要性についての発達の検討—親子関係、仲間関係、教師—児童関係に焦点を当てて—」日本教育心理学会総会発表論文集（51），2009 p.618

大場幸夫・吉田洋子・中塚博勝・堀智晴・民秋言・永田栄一・中村悦子・岩堂美智子・大西俊江『子どもの発達と社会生活』朝倉書店 1992年 pp.44－45

佐野泉・犬塚文雄「友人関係スキルを育てるガイダンスプログラムの構想—小学校入門期に焦点を当てて—」日本生徒指導学研究2010年 pp.45－56.

佐野泉「小学校入門期における仲間関係に関する事例研究—困難状況に陥る児童の問題行動との関連性に着目して—」学校教育学研究論集第23号2011年 pp.13－28.

Shure,M.B&Spivack,G Means-ends thinking,adjustment,and social class among elementary school-aged children, Jounal of Consulting and Clinical Psychology,38 1972 pp.348－353.

竹森元彦「社会性の発達に関する研究（1）—幼児の仲間関係の発達と保育の集団化に関する研究」日本教育心理学会第2回大会発表論文集1991年 p.166

田宮緑「事例から見る幼児期の仲間関係と自己形成」保育学研究（38）1 2000年 pp.12－19

「幼児期におけるキャリア教育に関する一考察」 一人間関係形成・社会形成能力に着目してー

鳥居深雪・木村伸司「高等学校から社会へのトランジションー学校設定科目の中で取組む」

「人間関係形成・社会形成能力」の教育ー日本教育心理学会第55回総会集録集2013年p.70

横山洋子「幼児が1年生に変容する過程Ⅰ」日本保育学会第54回大会研究論文集2001年  
pp.218－219

横山洋子「幼児が1年生に変容する過程Ⅱ」日本保育学会第55回大会研究論文集2002年  
pp.184－185

吉田辰雄「児童期・青年期の理解とその方法」『児童期・青年期の心理と生活』日本文化科学  
社 1990年 pp.28－29.